ミュージカル劇団寸

歌舞伎のマチの

小松は歌舞伎のマチである。今回の表紙を撮影した小松市の安宅は、謡曲「安宅」や歌舞伎の「勧進帳」の物語の舞台として有名であり、小松では今でも中学生たちによる歌舞伎が受け継がれ、5月のお旅まつりでは子供歌舞伎が演じ続けられている。

子供歌舞伎を子供の劇だと侮ることはできない。毎日の練習に裏打ちされた演技、現代風刺も盛り込まれた台詞。結構見応えがあるのだ。これも、そこに注ぎ込まれた子供たちやその家族、それを支える地域の人たちのエネルギーを考えれば当然とも言える。

その歌舞伎のマチに、創設19年を迎えた市民ミュージカル劇団「リトルパインシアター」があるのを、地元の小松でも知らない人が多いのは哀しいことだ。

実は、歌舞伎と日本のミュージカルには深い関係がある。特に歌舞伎出身の長谷川一夫が演出した「ベルサイユのばら」で、低迷していた宝塚が復活したことは有名で、当時は宝塚歌舞伎などとも言われたそうだ。歌舞伎とミュージカルの関係で言えば、松本幸四郎や市川猿之助など、歌舞伎役者がミュージカルに出演したり演出したりというケースは珍しくない。

写真・文　タカヤナギユタカ

古典芸能としての歌舞伎は、長い歴史の中で結晶した、独特で絶対的な「様式」を持っている。その「様式」は今の生活様式とはかけ離れた部分が多いが、そこで表現される日本人独特の心情は、現代にも通じる、と言うか共通する部分が多い。今でこそ歌舞伎は古典芸能だが、歌舞伎が愛されていた江戸時代には、歌舞伎は現代劇であり、そこに時代や社会との遊離はなかったはずだ。

古典芸能を守り、継承することはもちろん大切なことだろうが、その発展のためには、その時代に生きる人間との接点が大きくないと難しいだろう。歌舞伎役者たちがミュージカルなどの現代劇に取り組むのもそこに理由があるのかもしれない。

ここ小松でも、曳山子供歌舞伎など、伝統芸能を守り継承することはすごく意味のあることだが、リトルパインシアターのような今の時代を演じるマチの市民劇団が歌舞伎のマチ、小松に生まれ、長年続いてきたことは偶然とは思えないのだ。